

# PURE 2

*Manami & Yusei*

---

風

*fuu*

*eternity*



エタニティ文庫

## C o n t e n t s

P U R E 2 5

特別番外編

なくてはならないもの 377

PURE 2

プロローグ 魔女のくわだて

左手薬指の指輪を、早瀬川愛美はため息とともに見つめた。

こんな大きなダイヤモンドの指輪を、指に嵌めている自分が信じられない。

婚約の証……彼女に、そして彼女の住まいであるこの古いアパートに似つかわしくない指輪……

このとんでもなく高価に違いない指輪だけが……この場で浮いてしまっている。

でも……彼は愛美に、どうしてもこの指輪を受け取って欲しかったのだ。ふたりの繋がりをもっと強固なものとするために……

けれど彼の両親は……愛美の親友である藤堂蘭子の姉、橙子との縁談を望んでいるのだ。

心にキリキリと刺すような痛みが走り、愛美は胸を押さえて息を吐き出した。

不破を愛している。けれど、周りはふたりのことを祝福してはくれなさそうだ。

彼と一緒にいたい。彼女の望みは、ただそれだけなのに……

「……優誠さん」

彼の名を口にしたことで、ようやく止まった涙がまたも湧き上がってくる。愛美は唇を噛んで泣くのを堪えようとした。

明日、不破はアメリカに行ってしまう。

出発は明日でも、もう逢えない愛美にとっては、行ってしまったと同じこと。

頬を伝い落ちる涙を拭い、愛美は大きな宝石を見つめると、ため息をつきながら指輪をくると半回転させた。

この指輪はアメリカに住んでいる不破の祖母のものだ。愛するひとができたなら贈るようにと、祖母からもらったと不破は言っていた。その指輪が、いま愛美の指に嵌められていることを、彼の祖母は許してくれるだろうか？

なぜだか、不破の祖母に対して詫びたい気持ちになっってしまう。

彼女は指輪をつけたまま、石の思いを感じようとして手を握り締めた。

なんとなくそうすることで、この石が愛美を歓迎してくれているかどうかわかるような気がしたのだ。

愛美の勝手な思い込みかもしれないが、少なくとも拒絶のようなものは感じなかった。不破と愛美の婚約を祝ってくれる者が、誰かひとりでもいるのだろうか？

そう考えた彼女の脳裏に、桂崎百代の顔がぼんと浮かび、心に温かいものが湧き上がる。

った。

愛美の、もうひとりの親友……彼女だけはきつと祝福してくれる。迷いなくそう思えた。自分の部屋の畳に座り込んでいた愛美は、ゆつくりと立ち上がり、指輪を外してケースに戻すと机の引き出しの奥にしまい込んだ。この指輪を嵌めたままなんてことはできないし、万が一にも失くしたら大変だ。

愛美は喉元の首飾りに付いている薔薇はらに、指先でそつと触れた。

不破から誕生日のプレゼントにもらった首飾り……

これだけで良かったのに……

鬱々うつづと考え込んでばかりいた愛美は、百代の声が聞きたくてたまらなくなった。

彼女はバッグから急いで携帯を取り出した。

「愛美、誕生日おめでとう」

電話が繋がった途端、百代の明るいお祝いの声が飛んできた。百代の屈託のなさに、愛美はほっとしたものを感じつつ、嬉しさを噛み締めた。

「ありがとう」

「楽しかったの？」

「うん……楽しかった」

不破からプロポーズされたこと、そして婚約指輪をもらったことを百代に話そうか迷ったが、愛美は結局口にならなかった。

百代と話していると、自分が高校生だということを強く意識してしまう。

婚約などという単語を口にするのは、なんだか滑稽な気がした。

「それで、彼からの誕生日のプレゼントは？ 何もらったの？」

「えっと……首飾り、白い薔薇がついてるの」

愛美は首飾りの薔薇を指でもてあそびながら答えた。

「今度、見せて」

「うん、明日。あ、あの百ちゃん、わたしね、話したの、高校生だってこと」

「ほお、で、彼、なんて？」

「驚いたと思うけど……思ってたより、すんなり受け入れてくれたみたいだった」

「そっか。良かったじゃん。それじゃあさ、秘密もなくなったことだし、今度会わせてよ、彼に」

「あ、うん。でも……明日から一ヶ月逢えないから……」

暗い思いに囚われ、愛美は泣きそうになりながら答えた。

「どうして？」

「仕事でアメリカに行くって」

「そうなの？」

不破の不在が心に影を落とし、愛美は言葉にできないほど辛い気分にいるというのに、返ってきた百代の言葉はずいぶんと明るく嬉しげだった。

「ちょうど良かったわ」

ちょうど……良かった？

「あの、百ちゃん、何が？」

「作戦を練っているとこのよ。愛美にも、どうしても参加してもらわなきゃならないのにさ……愛美の彼氏、ちよつと邪魔だなんて思ってたのよね。あはは。神様、ずいぶんと気が利くじゃん」

作戦？ 参加？ 不破が邪魔？ 神様……？ 気が利く？

愛美は頭の中でそれらの単語を復唱し、最後に憤りに駆られて頬を膨らませた。

百ちゃん、わたし、死ぬほど淋しい思いをしてるんですけど……なのに、そんなに喜ぶなんて……あんまりだわ。

もちろん、そんな言葉は恥ずかしくて口にできない。不服を胸に抱きつつも、愛美は百代の言葉の謎に興味を引かれた。作戦とは、いったいなんなのだろう？

「百ちゃん、何を企んでるの？」

「いずれ時が来たら話すわ。それじゃ、明日ね。バイ！」

バイ！ の言葉の後に、プチッと通話は切れた。

愛美は切れた携帯を見つめて眉を寄せた。

## 1 心からの謝罪

学校に向かって歩きながら、愛美はずっと不破からもらった携帯を手に握り締めていた。

不破がアメリカに発ったのは昨日の午前中。飛行時間は、約十二時間だと言っていたから、昨夜の十時くらいには到着しているはずだ。時差は十四時間という話だったから……

愛美は携帯で時間を確かめて、頭の中で時差を計算した。

いま、日本は朝の七時半、とすると、不破の時間は……夕方夕方の五時半？ それも昨日の……

自分の考えていることが、途方もないことに思えてきて、彼女は大きく息を吸って吐き出した。

いま、この時……彼は遠い異国の地で、何をしているのだろうか？

いつ電話がかかってくるかわからないし、もし気づかなかつたらと思うと不安で、ど

うしても携帯から目を離せない。サイレントをやめて、マナーモードに設定を切り替えておくべきだろうか？

後になって、電話がかかってきていたなんて知るのは辛すぎる。けれど、授業中では出たくても出られないのだ。

……それでも、かかってきたと気づくことはできるのだし、知らずに終わるよりは、ずっとましではないだろうか？

もんもんと考えていることに疲れ、愛美は立ち止まって俯き、地面に向かって重いため息を落とした。

アメリカに行くなんて聞かなければ良かったのかもしれない。ただ、忙しくて逢えなただけなら、こんなに虚無感を持たずに済んだかも……

不破の存在が……愛美の世界の中で薄れてゆくようであまらぬ。

「早瀬川」

足元を見つめていた愛美は、突然呼びかけられ、驚いて顔を上げた。クラスメートの櫻井比呂也だ。

うろたえた愛美は、携帯を制服の上着のポケットに入れた。

「櫻井君、お、おはよう」

「おはよ」

「今日は早いね？」

櫻井は、いつも始業時刻直前にしかやって来ない。全速力で走り、ぎりぎりに教室に滑り込むのを日課とし、それをゲームのように捉えているらしかった。もちろん、時々アウトになる……

「お前を待ってんだ」

思わぬ発言に眉を上げ、愛美は櫻井を見つめた。

「わたし？ どうして？」

突然手を伸ばしてきた櫻井は、愛美の腕をぐっと掴んだ。

「ちょっと来いよ。こんなところで立ち話なんかしてたら、目立つちゃう」

ひとり言のようにブツブツ呟きながら、櫻井はさも当然のように彼女を引っ張ってゆこうとする。

「い、いったい、何？ どこに行くの？」

混乱した愛美は、櫻井に抗った。

いったん立ち止まって舌打ちした櫻井が、なぜか睨んでくる。

「何もしやしないって」

「ここでいいじゃない。話なら」

「込み入った話なんだよ。いいから素直についてくればいいんだよ」  
 櫻井の身勝手さに愛美はむっとした。どうして愛美が、彼に叱られなければならないのだ。なぜ櫻井の命じるままに、このことについてゆかなければならないのだ。

「櫻井君、勝手すぎるわ」

「言われなくてもわかってるよ」

すでに開き直っている櫻井の強引さに敵わず、結局愛美は、報道部の部屋に連れ込まれた。

彼は愛美を先に部屋に入れ、自分は人気のない廊下をさんざん窺ったあげくドアを閉めた。

異様に思える櫻井の行動に、愛美はさらに戸惑った。

「あの……話って何？」

「まあ、座れよ」

勧められた椅子に仕方なく腰かけると、櫻井も愛美の前に座り込んできた。

「正直に答えてくれよ。この間みたいなのはなしだ」

いやに真剣な顔で、櫻井は言った。

「この間？」

「あの、なんのことやら、さっぱりわからないんだけど？」

櫻井は苛立ちをあらわに、拳と手のひらを打ち合わせた。

「ほら、この間、駅のホームでお前を助けてやった後、俺の車で家まで送ってやったろ？」

「ああ。あの時はありがとう」

「礼はもういい。あん時さ、桂崎のこと話したろ？」

「百ちゃん？」

「そういえば、そんな話をしたような……」

「したかな？」

「したんだよ！」

櫻井のイラついた大声にぎよっとした愛美は、後ろにそっくり返った。

「あ、悪かった。つい……」

櫻井は気まずげに謝り、自分を罵るように舌を鳴らした。

「桂崎が特殊な能力を持つてるのかって、俺、聞いたろ？」

愛美は眉を上げた。

「で、それがなあに？」

「おっ前なあ」

櫻井の今度の叫びは悲鳴に近かった。彼は顔を歪め、気を取り直そうとしてか二度深呼吸し、傍から見ると落ち着いた声で話し出す。



「そういう風に、この話題をさらりと流すな。頼むから」

「あの、櫻井君の言いたいことが、まるでわかんないんですけど……」

首を傾げつつ彼に問いかけた愛美に対して、櫻井は平手で思いつきを叩いた。  
もちろん愛美は驚いて飛び上がった。

「な、何？」

「つまりだ。俺は桂崎の真実が知りたいんだよ」

真実？

「へ？」

「なんかお前、わざとやってないか？」

疑わしげな櫻井の顔と声に、愛美はぼかんとした。いったい彼は何を言い、何を愛美に求めているのだろうか？ さっぱりわからない。

「だからな。桂崎に、本当に特殊能力があるのかって聞いてんだよ」

「ああ。そのこと」

ようやく呑み込めた。

「そうだよ。それで？」

愛美は、どこか縋すがるような目を向けてくる櫻井を、眉をひそめて見つめた。

「百ちゃんの能力って、櫻井君は、何を指して聞いているの？」

「なんでもだよ。とにかく普通じゃ考えられないような超能力とかだ。あいつ、ほんとに使えるのか？」

「どうしてそんなことが聞きたいの？」

愛美は用心深く尋ねた。彼は百代の不思議な力について、記事にしようと考えているのではないだろうか？

「気味が悪いんだ」

「は……い？」

「なんか俺、あいつに、心の中を見透かされてるような気がしてならないんだよ」

「ああ、そうね」

それは愛美も時々感じることだ。

「そうねってなんだよ！ そうねってのは！」

櫻井がえらい剣幕で怒鳴った。どうやら愛美の返事は、櫻井の神経をひどく逆撫でしたようだ。

「お前、普通に肯定してんじゃねえ」

恐れに駆られたように、櫻井は愛美に向けて威嚇いかくするように腕を振り上げた。

「別に肯定したわけじゃ……。ただ、櫻井君がそう思うの、よくわかるなって思ったから……」

「お前もそう思うのか？」

愛美は素直に頷いた。

「なら、なんであいつと平気で友達やってられるんだよ。お前、気味が悪くないのか？」  
櫻井のその発言に、愛美は勢いよく立ち上がった。

バシーン！

衝撃音の後、愛美はジンジンする右手を握り締めた。

櫻井は啞然として赤くなった頬を押さえている。

「な、に……？」

「いま自分が、どんなひどいこと口にしたかわからないの？ 櫻井君……貴方、最低だわ！」

強烈な憤りから櫻井の頬を叩いたものの、これまでひとを叩いたことも、怒鳴りつけた経験もない愛美の身体は、自分の憤りに耐え切れずに小刻みに震えていた。震える足のせいでよろめきながら、愛美は部屋を後にした。

叩かれた櫻井は追ってはこなかった。

彼は最低だ！

愛美は胸に込み上げる哀しい気分を押し殺しながら、二度と彼とは口を利くまいと心に誓った。

「愛美い」

教室に入ると、愛美の姿を見つけた百代がすぐに声をかけてきた。右手を上げつつ笑みを見せ、百代はこつちへ来いというように手を振った。

「百ちゃん、おはよう」

百代の顔を見たとせいで、櫻井に対する怒りが煽られたが、愛美はなんとか普通の笑みを浮かべようと頑張った。

「いつもより遅いじゃん」

「あ、うん」

「なんかあったね？」

瞳をキラキラさせて、百代は下から愛美を見上げてきた。何か含みを感じさせる、悪戯っぽい表情をしている。

「な、何も……」

「で、何があったの？」

百代は愛美の心を読んだように、問いかけてきた。

こういう微妙なやりとりが、百代を不思議少女に感じさせるのだ。そして百代の勘は……勘という曖昧な呼び方が相応しくないほど正確だ。でも、百代の友として、あの櫻

井の発言は許せるものではない。

「櫻井、何か言ってきた？」

「えっ？ ど、どうして……」

「いま、櫻井って名前、口にしたじゃん」

「く、口にした？ ほんと？」

「うん。唇が動いたよ。それで、櫻井、なんだって？」

く、唇が動いた？

「ていうかさ……。だいたい予想ついてるんだけどね」

百代が、ニターツと笑った。

櫻井の言葉に同意などしたくないが……。この笑いは、正直薄気味悪かった。

「百ちゃん、どういうこと？」

「ほら、話したじゃない。例の作戦よ。昨日の夜、やつに電話したんだ」

確かに作戦がどのと言っていたが……

「ちよつとさ、どきまぎさせるようなこと言ってやったから、わたしのこと、そうとう

に恐れてるはずなんだ」

その瞬間、百代の視線が愛美の背後に向けられ、百代は「けへへ」と、とんでもなく

気味の悪い声で笑った。

ゴンガンと派手な音がし、愛美は驚いて振り返った。

櫻井が無様な姿で床に転がっていた。突然ひっくり返った櫻井に、男子学生たちが笑いながら群がっていく。彼は百代の不気味な笑いを目にしたのに違いない。

櫻井の情けなさそうな呻き声を耳にし、愛美は後ろめたい気分に取りつかれた。

「百ちゃん、櫻井君に何を言ったの？ 彼、ひどく怖がってたわよ」

百代のほうへ顔をぐっと近づけた愛美は、囁き声で問いかけた。

「そうでなくっちゃ。まず第一作戦は成功のようね」

「作戦って、なんなの？」

「今日の帰りに……。そうだ。明日土曜で休みだし、予定ないんなら、愛美、うちにおいでよ」

「あ、うん……」

もごもごと返事をしつつ、愛美はもやもやした気分で頷いた。

どうやら櫻井は、百代の被害者だったらしい。愛美は気まずい気分で、すでに自分の席に移動した櫻井を窺った。櫻井は自分の椅子に座り、頭を抱えて机に突っ伏している。

加害者の百代は、そんな櫻井のことなど気にもかけず、いつも持ち歩いているお気に入りの黒い本を開き、何事もなかったかのような涼しい顔で、ページに目を落としていた。

櫻井を気にするそぶりなど、微塵もない友……

櫻井君……。ごめんなさい……

心の底から反省し、愛美は謝罪した。

2 ありえないスカウト

放課後、愛美はすばやく教室を出てゆく櫻井に気づいて、慌てて彼の後を追った。叩いたことを、今日のうちに謝っておきたかった。

一日中ずっとそのつもりだったのだが、そのチャンスがなかったのだ。櫻井自身が、百代を頑なに避けているせいだろう。

廊下に走り出た愛美は、階段方向に向かっていている櫻井の後ろ姿を見つけて駆け出した。櫻井の足取りはまるきり元気がなく、愛美はすぐ彼に追いつけた。

「櫻井君」

呼びかけた愛美の声に驚いたらしく、びくりと肩を揺らし、櫻井はゆっくりと振り返ってきた。

ずいぶん顔を引きつらせていたが、背後にるのが愛美ひとりとわかって、ほっとしたようだった。

「なんだよ」

かなり文句がありそうな顔で、櫻井はぶっきら棒に言葉を投げってきた。

「あの、今朝はごめんなさい。叩い……」

突然肩を掴まれ、愛美はぎょっとして言葉を止めた。乱暴な行動に出た櫻井は、愛美のことを睨みつけてくる。

「あ……の?」

彼は無言のまま愛美の背中に手を当て、戸惑っている彼女を、強制的に階段の上へと連れていった。屋上に出たところで、愛美は櫻井から、あらためて睨みつけられた。

「お前な、女に叩かれたなんてことが知られたら、俺の金券にかかわるだろうが」

「あ……ごめんなさい。ただ、今朝のこと、謝ろうと思って……」

「謝らなくていい。あれは俺が悪かった」

「え? そんなことは……」

「桂崎を気味が悪いって言ったことは謝る。けどな……まあ、お前に愚痴<sup>ぐち</sup>つても仕方がないか」

櫻井は心の中の重いものを吐き出すように、ため息をついた。

「あの、そんなに気にしなくても……。百ちゃん、何もかもわかるわけじゃないらしいし……」

「あのなあ!」

声を張り上げた櫻井は、愛美の頭を掠めて、壁に力任せに手をついた。耳元でパンと激しい音がし、愛美はビビった。

「それって、裏を返せば、少しはわかるってことになるんだぞ」

凄みのある櫻井の目に、愛美は笑顔を引きつらせた。

「で、でも、気にするほどじゃないと思うの。勘は確かだけど、内容的にはとっても曖昧あいまいみただから」

「救いになんねえよ」

投げ捨てるように櫻井は言い、愛美に背を向けたが、彼の肩はひどく疲れを滲にじませているように感じられた。

「とにかく、百ちゃんは、ひとに危害を加えたりしないし……そんなに気にすることないと思うの」

櫻井は愛美に向き直ったが、彼女のいまの言葉を吟味しているのか、むすつとした顔で黙り込んだ。

「確かに、あいつがひとに何かすることはないかもな」

ようやくの櫻井の言葉に、愛美はうんうんと相槌を打った。

唇を突き出して腕を組んだ櫻井は、短い息を吐くと、気分を切り替えようとするように上空を見上げ、何やら含みのある瞳で愛美を見つめてきた。

「ところでお前、保志宮ほしみやさんと、ほんとに付き合ってるのか？」

「えっ?」

「あのひと、俺らより十くらいは上だよな。なんかさ、十七、八の女の子とあのひとが本気で付き合うつてのが、どうもピンと来ないんだよな」

「あの、付き合っていないから」

愛美は強い否定を込めて手を横に振った。

櫻井を誤解させたままだったとは……

確かに保志宮輝ほしみや榎は、愛美の彼氏として数回行動を共にした。だが、あれはすべて蘭子の企みのためにそう見せかけただけのことだったのだが……櫻井はそんなこととは知らない。

「そうなのか? でもお前、ドレスアップするとずいぶん雰囲気変わるからな。胸なんか、とくに凄いつつーか……」

「はい?」

とんでもない櫻井の発言に呆気にとられた愛美は、尻上がりに返事をした。櫻井は顎あごに指を当て、思案するように愛美の全身を眺めてくる。愛美は、ひどく居心地が悪かった。

「学園祭、もうすぐだろ?」

学園祭? 話が飛び、愛美は戸惑った。

「あ……うん。そうだね」

「早瀬川、お前モデルやんない？」

なんのことやら理解できず、愛美は返事ができなかった。

「やりたがる奴はいくらでもいるんだけど、誰でもいいってわけじゃない」

「あ、あの……櫻井君、モデルっていったいなんのことなの？」

愛美の問いかけに、櫻井は眉を上げて愛美を見つめてきた。その瞬間、彼の瞳に理解の色が浮かんだ。

「ああ、そうか。お前……四月に他校から転入してきたんだもんな。知るわけないか」

「学園祭で、何かあるの？」

「ああ、俺が所属してる報道部の主催で、コス……いい、いや、写真撮影会をやってるんだ。美術部も協賛して、本格的な舞台も造るんだぞ。凄いだろう」

凄いだろうと胸を張って言われても、困るというか……

「主催する報道部としては、最高のモデルを提供したいんだ。つまりお前は、俺が見込んだモデルってわけだ」

いや、別に見込まれなくていいし……

「モデル料、がっかりさせないくらい払うからさ」

とことん本気らしい櫻井の表情……

彼女は顔色を変えて後ずさった。

この展開はなんなのだ？　なんで突然、こんな話に？

「ありえないから」

「あ、誤解すんな。服脱げとか、水着姿なんてことじゃないって」

そういう問題ではない。いや、そういうことだったら、もつと問題だが……モデルを  
するということ自体が……

「ありえないわ」

彼女ははっきり宣言し、櫻井に背を向けて階段へと向かった。

「深刻に考えるようなことじゃないって、服着てていいんだからさ。ちよつとカメラの前  
に立つて、につこり笑う……それでいいんだよ。簡単なことさ」

執拗に説得してくる櫻井に、愛美は呆れた。

「だから、ありえません！」

階段の下り口に立った愛美は、大声で言いながら櫻井を振り返った。

彼女はぎよつとした。すぐ目の前に櫻井がいたのだ。

「その代わり、この眼鏡は取ってもらわなきゃならないけどな」

櫻井がそう言った瞬間、愛美の眼鏡は櫻井の手の内にあった。

「何するの。返して」

「モデルやつてくれるっていうなら、返すよ」

愛美は櫻井の強引さに腹が立った。

「他の子に頼めばいいでしょ」

櫻井の手に握られている眼鏡に勢いよく手を伸ばした愛美は、身をかわされて倒れそ  
うになった。慌てた櫻井は、倒れる直前の愛美を抱え込んで救ってくれた。

「ごめん。……でも、お前がいいんだって」

愛美のウエストに手をかけていた彼は、体勢を立て直そうとしている愛美に手を貸し  
てくれながら、いくぶんすまなげに言った。

「ほら」

愛美は櫻井が差し出してきた眼鏡を受け取った。すぐにかけてしまった愛美の手を櫻  
井が掴んで止めた。

「早瀬川、お前、コンタクトにしたら？ そのほうが絶対いいぞ」

言いたいだけ言うと、彼はようやく愛美の手を離した。

眼鏡をかけていつもの視界を取り戻した愛美は、階段を下りようとして、階段下の踊  
り場にいる蘭子と百代に気づいた。

「蘭ちゃん、百ちゃんも……ごめんなさい。すぐに戻るつもりだったの」

「用事は終わったの？ 帰るわよ」

明るい声で百代が言った。

「うん。それじゃ、櫻井君」

「真剣に考えてくれよな。俺、本気だし。お前じゃなきゃ駄目なんだ。嘘じゃないから」

「あ、あのね」

「愛美」

櫻井に完璧に諦めてもらおうと、すっぱり断ろうとした愛美は、百代に名を呼ばれて  
視線を下にいる百代に向けた。

「蘭子の迎えの車も待ってるし、早く帰ろ」

愛美は頷いた。

今日は三人で、百代の家でお茶をしようという話になっている。

「わたし……今日は……駄目だわ」

愛美はいつもと違う蘭子の様子に眉を上げた。蘭子の声は、喉が詰まったような響き  
があった。どうも顔色が悪いように見える。

「あら、どうして？」

「駄目なの！」

いったいどうしたというのか、百代の言葉を蘭子は鋭く遮やぶった。

「わ、忘れてたの。今日は予定があったの。そういうことだから、悪いけど先に帰るわ」

早口でまくし立てるように言い、蘭子は階段を駆け下りていった。  
「ら、蘭ちゃん？」

わけがわからず、百代のいる踊り場まで下りた愛美は、そのまま蘭子を追おうとして百代に腕を掴まれた。

「百ちゃん？」

「いまは、放っておこう」

「どういうこと……？」

愛美は眉をひそめ、いまの状況を頭の中で理解しようとした。蘭子は何かシヨックを受けたようだった。シヨックの理由として思い浮かぶのは……愛美と櫻井のやりとり？

もしかして……蘭子は、櫻井と愛美を誤解して？

そういうえば、保志宮が仄めかしたことがあった。蘭子と櫻井……ふたりは……

「櫻井」

まだ階段の上にいる櫻井に百代が声をかけた。

「な、なんだよ」

櫻井はまだ百代を恐れているのか、ずいぶんと腰が引けている。

「グラビアアイドル愛美のマネージャーはわたしだから。アポイントメントはすべてわたしを通すようにね」

櫻井が「はあ？」と大声を出した。

「百ちゃん、何言って」

なぜか百代は、愛美の肩に手を置いて、なだめるようにさすってきた。

「すべてこのわたしに任せておけば良いのよ。悪いようにはしないって」

愛美は眩暈めまいがした。

我が友ながら、櫻井などより百代のほうが、格段にたちが悪い……と、正直思う。

「すべてこの百代にお任せなさいって」

百代はそう言うのと、ふっふっふと、ふてぶてしい笑いを漏らした。

「違うでしょ。なんかそれって、根本的に違うでしょ？」

「何が？」

叫ぶように言い募った愛美の言葉を、百代は短い言葉であっさりと受け流した。

愛美は手応えゼロの感覚に、また眩暈を覚えた。

「百ちゃん！」

百代は愛美の抵抗を抑え込むように、彼女の頭を脇に抱え込んだ。

「もう、百ちゃんてば、離して」

「あのさあ」

「櫻井、なあに？」



百代はじたばたしている愛美と格闘しつつ、櫻井に返事をした。

「いや、藤堂、どうしたんだろうと思って……。ところで、お前ら、いつからここにいた？」

「わたしと蘭子には、時差があったとだけ言っておこう」

時差という言葉に、愛美は即座に反応した。

彼女は頭を抱え込まれたまま、ポケットに手を突っ込み、携帯を取り出した。

不気味なキツヒツヒという笑い声を耳にしながら、愛美は携帯の表示を見つめた。

不在着信一件……

愛美はその文字を食い入るように見つめた。

「お前、わざとだろ。わざとそうやって俺を怖がらせて、面白がつてるんだ」

不在着信一件……五分前……五分前……

心と身体がずーんと重力を増した。胸が締め付けられ、息が詰まった。

「櫻井、いいこと。あんた、わたしになんか気を取られてると、大事なもの見過ごすわよ」

からかうようでもあり、諭すようでもある百代の声が、意味をもたず愛美の頭に響く……

「な、なんのことだよ？」

「わかつてるくせに」

「わかかんねーよ！」

「さ、愛美、帰ろ」

頭を解放され、愛美は百代に促されるまま歩き出した。

「愛美、よくやったわ。明日は、何か美味しいもの食べようね」

「何？」

愛美は機械的に口にした。

「あんたどうしたの？」

愛美は足を止め、携帯を握り締めた手で、顔を覆って泣き出した。

「こいつ……どうしたんだ？」

泣いている愛美の耳に、戸惑ったような櫻井の声が聞こえた。

「俺のせいとか……じゃ……ないよな？」

「どうやら彼は、距離を置いたところから、百代に尋ねているらしい。」

「まあ、違うんじゃない」

「お前って、どうして必要な時に限って、そういう風にひとを不安に陥らせる曖昧な言

い方するんだよ」

「大袈裟ね」

大きな声で喚くように言った櫻井の言葉を、百代は鼻であしらった。

「櫻井君のせいとかじゃ……ないから」

愛美は、俯き加減でぼそぼそと言った。

シヨックが強すぎて思わず泣いてしまったが、もしかすると、不破はまたすぐにかけてきてくれるかもしれない。なのに泣いてなどいたら、思うような会話もできなくなる。愛美は胸のあたりをさすりながら、自分をなだめた。

「どう、落ち着いた？」

「うん」

「よし、ほんじゃ、帰ろう」

「なあ、早瀬川」

かなり遠慮がちな櫻井の呼びかけに、愛美は一瞬間を空けて、彼を振り返った。

「さっきの話、真面目に考えといてくれよな」

さっきの話……？

一瞬、なんのことかわからなかった愛美は、すぐに思い出した。

「嫌よ、モデルなんて……」

「櫻井、だーかーらー。わたしを通せて言ったはずよ」

「なんでお前が介入してくるんだよ。早瀬川のことなんだから、彼女が自分で決めることだろう」

「あんた、存外、察しが悪いわね」

「はあ？ 察しが悪いだあ」

「直接愛美と交渉したら、百パー断られるに決まってるじゃん。それを、わたしが説得してやろうと言うのよ」

櫻井は、話の流れにきよとんととなった。

「お前、説得してくれるのか？」

目の前に当の愛美がいるというのに、彼女を抜きにしたやりとりで愛美は憤怒かんぬが湧いた。

「百ちゃん、何考えてるのよ。わたし、そんなものやりはしないわ」

「まあまあ」

両手を大きく上にあげた百代は、ことを収めるように両腕を上下させた。

「この話は、いまはこれでおしまい、ねっ？」

「百……」

顔をしかめて口を出そうとした愛美は、躰しつけの悪いベットにするように、百代からおでこをペチンと叩かれた。不意をつかれて避け切れなかった愛美は、唇を尖らせながら痛むおでこを押さえた。すでに何度も体験していることなのに、毎度、むざむざ叩かれてしまう自分に腹が立つ。

「物事には、適切な時というのがあるの。わかる？ 櫻井」

からかいのこもった言い含めるような百代の言葉に、櫻井はかなりむかついたようだ

つたが……とりあえず何も反論しなかった。

### 3 父のぬくもり

愛美は不服を抱えたまま、百代とともに昇降口に向かった。表に出たところで、彼女は突然帰ってしまった蘭子のことを思い出した。

「蘭ちゃん、……いいのかな？」

他に適当な言葉を思いつけなくて、愛美は百代にそう尋ねた。

「いいのよ」

「蘭ちゃんは、櫻井君のこと……」

「自覚したんじゃない。でも否定するだろうけどね。自分に」

「自分に？」

「うん。自分に。ところで、さっき愛美が泣いたのは、彼氏がらみ？」

「あ……うん。電話来たのに……不在着信になって……気づいたのがさっきで、五分後で……」

「かかってくるよ」

当然のようにそう口にした百代に、愛美はハツとして視線を合わせた。

「ほ、ほんと？」

「うん。感じるから」

こともなげに言われ、愛美の心は躍おどった。

「いつ、いつかかってくる？」

せつつくような愛美の様子に、百代は苦笑した。

「それはわからないわよ。でも、そろそろじゃないの」

愛美は、急いで携帯を取り出した。そして、いつでも出られるように、貫くような視線で携帯の画面を見つめた。

「ね、歩きながらにしなよ」

「あ、うん」

背中当てられた百代の手で前に押され、愛美は素直に足を動かした。

「それでさ、モデルのことだけど。やらなきゃ駄目よ」

愛美は瞬まばたきも忘れ、携帯を見つめ続けていた。おかげで、百代の言葉の内容は、ほとんど聞き取れていなかった。

「あ……うん」

彼女は無意識に相槌を打った。

「よしっ、そうこなくちゃ」

百代の勢いのある声に、愛美はいったん顔を上げたものの、すぐに携帯に視線を戻した。しばらく間を空けて、また百代は話しかけてきた。

「撮影用の服は、わたしが用意するから。あんたは安心して、全部わたしに任せてればいいからね」

携帯は、まだなんの反応もない。

任せてという単語は、愛美の意識に入る寸前でストップした。

「あ……うん？ 何？」

瞬きしていなかった目がひりつき、彼女はパチパチと瞬きしつつ、頭に入ってこなかった百代の言葉を聞き返した。乾いた目が擦れ、じわりと湧いた涙が目が潤んだ。愛美は眼鏡を外して、指先で瞼に触れながら百代に顔を向けた。

「百ちゃん、いま、何か言った？」

「わたしに任せろって言ったの。わかった？」

「任……せる……？」

「いったい、百代に何を任せるのだったか……？」

「来たよ」

百代は愛美の携帯を見つめて早口に言った。

「ええ？」

愛美は慌てて携帯に目を落とした。ピカピカと光る着信の光が、まるで魔法の光のように目に飛び込んできた。

「き、来た」

愛美は叫ぶと、なぜか自分でもわからないが、携帯を持った手を、ぐいっと前に突き出した。興奮状態に達した友の背を、百代はぼんぼんと軽く叩いてきた。

「ゆっくり話しなよ。わたし、先に帰るから」

その言葉を置いて、百代はすぐに背を向けて校門へと駆けていった。

「百ちゃん、ありがとう」

感謝で胸がいつぱいになりながら、愛美は駆けてゆく友の背に向けて叫んだ。不破から電話が来たのは、百代のおかけのような気がしてならなかったのだ。

「も、もしもし」

「まな」

即座に不破の声が返ってきた。

安堵と切なさで急激に胸を突き、愛美は思わず泣きそうになった。

「まな？」

不破の心配を含んだ呼びかけに、愛美はなんとか自分を落ち着かせた。

「わたし……声が聞きたかった」

不破の短い吐息が聞こえた。

「私も……貴方の声が聞きたくてならなかった……なんでもいい……」

愛美は、不破の声の響きが、ひどく気になった。彼の言葉が中途半端に途切れたことも……

彼の意識のほとんどは、すでに眠っているのではないだろうか？

「まな……お願いです……何か、話して……聞いてほしい……声を……」

「優誠さん」

「……はい」

「眠いのですよ？」

「……大丈夫です」

彼の言葉は、ワントテンポ以上遅れて返ってくる。

彼は眠いのだ。それもとんでもなく……

アメリカの時間は、もうすぐ二時になるうとしているはずだ。向こうについてから、まったく寝ていないとすれば……

「優誠さん、もう寝たほうがいいです」

「ええ。もう少し……貴方の声を聞いて……貴方は……お忙しいんですか？」

「わたしは大丈夫なんです。けど、優誠さんは休まないと。明日の朝はゆっくり寝ていられるんですか？」

「いえ。どこからか……自分の分身を連れてきたいほど……スケジュールが詰まって……」

言葉が発することが、彼のエネルギーを奪いでもしたかのように、不破は疲れた長い息を吐き出した。

愛美は顔をしかめた。

不破はいますぐ寝なければならぬ……彼は疲れ果てている。

「もう休んでください。眠たいのでしょうか？」

「いえ……そんなことは……」

そう口にする言葉も、すでに眠りの中にあるようだ。

「優誠さん、あの、次はいつ電話してもらえますか？」

「貴方の……私は……」

意味の繋がらない短い呟きが続き、愛美は焦りが湧いた。

「優誠さん」

「まな……どうして……まな……」

「優誠さん？……優誠さん？」

互いの言葉は、まったく繋がらないものになり、終いには、不破は何も言わなくなっ

た。スースーと、ゆつくりと繰り返される微かな寝息だけが聞こえる。間違はなく、彼は完全に寝入ってしまったらしい。

愛美は青くなった。国際電話なのに……このまま通話を打ち切らずに眠ってしまったら……いったい？

「優誠さん！」

愛美は声を張り上げて彼を起こそうとした。だが、返事はない。

「起きて！ 優誠さん起きて！」

声を張り上げて叫んだ愛美は、自分の目の前を歩いてゆく生徒と目が合った。校門近くで、携帯に向かって大声で叫んでいる愛美を、少なくとも生徒が注目していることに、彼女はいまさらながら気づいた。

愛美は、携帯を握り締めたまま校門を飛び出した。愛美が切つてしまえば、通話は終わるのだろうか？ でも、終わらなかつたら、料金はどうなるのだ？

やはり、なんとしてでも、彼を起こさなければ……

周りにまったくひとがいないわけではないわけではなかったが、愛美は立ち止まると、携帯に向かって不破の名を繰り返して呼び続けた。

かなりの時が過ぎたところで、眩くような「まな」という声が聞こえ、愛美はさらに声のボリュームを上げて呼びかけた。

「優誠さん、電話を切ってください」

「あ、ああ。電話……まな、駄目だ……眠くて……」

「切つて、電話切つて」

「ああ……わか……おや、すみ……」

途切れ途切れの、ほとんど息だけの不破の呟き……

「おやすみなさい」

彼女は心と反した言葉を、嫌がる唇から押し出した。不破のけだるく切なげな吐息が耳に届き、そして電話は切れた。声が聞けたのだからと愛美は自分に言い聞かせたものの、淋しくてならなかった。

「これが……良くないか？」

さんざん時間をかけて吟味したあげく、父はひとつの陶器を手を取った。特別、愛美らしいといえる器だ。

テーブルの上には、これまで愛美が作った焼き物が六個並べられている。大学の推薦入試に、自分の自信作を提出しなければならぬのだ。

愛美は素直に頷いた。現役の教授である父の眼鏡に合ったものが一番だろう。それに彼女もこの器は好きだった。黄瀬戸きせとの淡い地に、野花のばなの画があしらってある。そして効

果的に、散らしてある織部の緑が全体の温かみを増している。

愛美の作るものは、大胆さとは無縁だし、意表をついたりもしないが、その素朴さがいいと父は言う。

この作品は今年の五月くらいに作り、出来上がりを気に入ってすぐに使おうとした愛美に、父が、これは取っておこうとしまい込んでしまったものだ。それ以来、父は、出来の良さそうなものがあるときまい込むようになった。それまでの父はそんなことをしたことがなかったから、不思議に思っていたのだが……どうやら父は、その頃から愛美の進学について考えていたらしい。

「お父さんは、入試には関わっていないの？」

徳治が珍しく笑みを見せた。

「焼き物の世界では、私はまだまだ若輩者だ。造形学部には、私より年かさの教授が数人いる」

「面接は、その方たち？」

「そうだ。学部長も同席するだろうし……後は大学の学園長や理事だろう」

「理事？」

「ああ。何人が面接の場に同席するのは、私にもわからない」

「わたしがお父さんの娘だってことは……？」

「麻生教授には、話をした」

「麻生教授？」

「私が世話になっっている方だ。後の面々は、私とお前の苗字が同じだと思っただとしても、ことさらに興味を向けてはこないだろう」

愛美は頷いた。

面接というのはひとを萎縮させる。

しかし避けられないものならば、仕方ないだろう。

「いつものお前でいればいい。面接の受け答えで合否は決まらないさ」

「あがつちゃって、何も話せなくなるかもしれないわ」

「不合格ならそれでもいいさ。きつと、お前の道は他にあっていいことなんだろう」

愛美は淡々と語られた父のその言葉に微笑んだ。途端に気が楽になった。

「きつと、そうね」

彼女は、白い布にくるんだ器を木箱の中に丁寧にしまっている父を見つめながらそう言った。

なんとも言葉にならない父のぬくもりに、愛美の心は満ちた。

#### 4 瞼の裏の幻影まぶた

「さあさあ、お入りよ」

玄関先で元氣よく迎えてくれた百代に頷き、愛美は靴を脱いで家の上がらせてもらった。

「百ちゃん、おば様とおじ様は？」

百代の後について歩きながら、愛美は尋ねた。

「朝っぱら早くから一緒に出かけてったよ。なんか、新しいスーパー銭湯ができたとかで、今日と明日は、半額なんだってさ」

「スーパー銭湯？」

前を歩いていた百代が立ち止まり、愛美のほうを振り返ってきた。どうしたのか、にやにや笑っている。

「百ちゃん、なあに？」

「いんや、スーパー銭湯がどんなものかわからないでいるあんたが、面白くってさ」

「お、お風呂なんでしょ？」

「確かにお風呂だよ。スーパーだけどね」

つまり、スーパーとお風呂が、一緒になってるわけか？

「お買物ついでに、お風呂に入るの？」

愛美の言葉を聞いた百代は、お腹を抱えて笑い出した。

笑われている意味がわからないでいる愛美を、さんざん笑いものにした百代は、愛美の頭を小突きながら「あんたは、コントのボケ担当かっの」と、突っ込みを入れてきた。

「スーパー銭湯つてのは、サウナとか岩盤浴とか、ともかくいろんな設備があるお風呂屋さんのことだよ」

そ、そうだったのか？

「ス、スーパーって聞いたら、誰だっ……その、食料品とか売ってるお店、思い浮かべると思うけど……」

愛美は頬を染め、物知らずな自分を、しどろもどろに弁護した。

「へいへい」

笑いつつ背中をとんとんと叩かれ、愛美はむっとした。

「そんじゃ、今度さあ、蘭子も誘って……」

百代は急に言葉を止め、きゅっと眉を寄せた。

「考えたらスーパー銭湯なんぞ行くより、藤堂家のお風呂に入らせてもらったほうがいい



いよね。あの家の風呂は、スーパー銭湯なんぞ比べ物にならないくらい、色々取り揃ってるもん」

ひとり納得したように言った百代は、まだ不服を込めて唇を突き出していた愛美に構うことなく、台所へと足を向けた。

「先に部屋に行つといて。おやつ持つてくからさ」

「わたしも手伝うわ」

「お客様にそんなことさせられないよお。それに持つてくのは、お盆ひとつだし」

百代の姿は、すぐに台所の中に消えた。

愛美はためらいつつ、階段を上っていった。

百代の部屋の中に入り、パタンとドアを閉じた瞬間から、愛美はひどく居心地の悪い思いに囚われた。考えてみれば、百代の部屋にひとりであるなんて、これまでなかったのだった。

百代と一緒にいた時は感じなかった、とらえどころのない心細さのようなものが、胸を去来するのはどうしてなのだろう？

異次元空間にいる……そんな感じなのだ。

空気が安定していないというか……部屋の広さが固定していないというか……

いったい……この部屋に感じるこの感覚はなんなのだろう……？

おやつなどもういいから、いますぐ百代に戻ってきて欲しいところだ。

「まさか……この部屋……なんか、いないよねえ？」

思わず、見えない誰かに問うように、愛美は口にしていた。調子はずれの歌のように、声は何度か裏返り、言葉が震える。

愛美は不破からもらった携帯を急いで取り出し、パカッと開いて画面を見つめた。不破のことを考えていればいい。百代が戻ってくるまで、不破のことを考えているとしよう。

待受画面の中の不破は、どことなく、問うような目をしている。照れたような笑みを浮かべている不破の写真も好きなのだが、この写真の不破は、愛美の言葉を聞き、やさしく語りかけてきてくれるように感じられるのだ。

いま、不破の時間は夜の八時か九時。

今日も忙しかったのだろうか？ もう仕事は終わったのだろうか？

……寝る前に……電話をかけてきてくれるだろうか？

ふーっとため息をついて目を閉じた愛美は、ぎよっとして目を開けた。

全身を固くした愛美は、目を見張り、きよときよと部屋のの中を見回した。

閉じたはずの視界に、何かが……見えたよね……？

「う、うっそ」

まさか……そんなはずはない……

愛美は自分を落ち着かせた。

百代の部屋が普通でないと思いきぎっているために、そんな気がただけ……そう、きつとそうだ。

彼女は、恐る恐る、また臉まぶたを閉じた。

はっ！

愛美は激しく喘あえいだ。

目にしたものすべてが、一度に意識に入ってきた。

床にひとが転がっている。身動きしないその男性は……不破だ！

そのショッキングな映像に、彼女は口を開き、悲鳴をあげられぬまま全身をわななかせた。

金縛りにあったように動けない生身の身体を、どこか別次元で感じている自分がある。そしてそれとは別に、倒れている不破の顔を躍起やつきになって覗き込もうとしている自分がいた。

密度の濃い空間は、まるでゼリーと化したかのように重く、愛美は必死になって、不破のほうへと移動し、彼の顔を間近に覗き込んだ。

その瞬間、けたたましい音が、愛美を現実に戻し、彼女は息を吹き返したように、肺に空気を吸い込んだ。

部屋にドヴォルザークの『新世界より』の曲が鳴り響いている。手にしている携帯が、不破からの着信を告げているのだ。

即座には動けなかった愛美は、携帯をじっと見つめ、重い腕を上げて額に手を触れ、それからひどく震える手で携帯を耳に当てた。

「まな」

不破の声だった。

いつもの、落ち着いたやさしい声……

愛美は、はっつと息を吐き出した。

「ゆ、優誠さん」

愛美の声が尋常でない響きを持つていたからだろう、不破は驚いたような間を空ける。

「まな？ ……いま、話せますか？」

「は、はい。話せます」

「良かった。ずっと、貴方の声が聞きたかった」

「わたしも……です」

ふたりの微かな息遣いが、お互いの繋がりの中で混ざり合う。彼女は、泣きたくなくなる